

# 兵庫県加東郡滝野町上滝野における祝言のあいさつ

黒崎 良昭

## ○はじめに

1. 対象地の地理的環境：滝野町は兵庫県南部のほぼ中央にあり、加古川の中流域に位置する。海岸部明石市から北へ約30キロ、町の中心部を国道175号（明舞国道）が通っている。
2. 対象地の社会的経済的環境：上滝野は、古く加古川が舟運に利用されていた頃は、荷の集散地として栄え、あるいは飛鮎の名所として京阪神からも多くの観光客を集めていた。現在は地区の中央を国道175号が通り、近くに中国自動車道滝野社インターも作られたため、交通の便がよくなり、多くの商店が営まれ、近年はマンション建設も急ピッチで進められている。また、播州織の中心地西脇市、日本一のそろばん産地小野市に隣接し、織物工業、機械工業も発達している。
3. 生業：主産業は農業であるが、専業はごくわずかであり、多くはサラリーマンとして町内外に勤めを持っている。
4. 交通：中国自動車道滝野社インターの北に位置し、高速バスで新大阪まで1時間余り。JR加古川線滝野駅、滝駅の2駅があり、山陽線加古川駅からの所要時間は約50分である。
5. 人口：上滝野地区の全戸数は592戸で、人口は約1930人である。最近はマンションなども多く建てられて町外からも人が移り住み、人口は増えつつある。
6. 調査年月日：1990年8月1日  
午後2時10分～3時50分  
補充調査 1990年11月8日  
午後8時00分～8時50分
7. 方言話者：芹生登代 大正10年1月生（69歳）
8. 調査者、調査場所：黒崎良昭、話者自宅
9. 調査方法：一問一答式の質問法によった。回答はすべて話者の試演の形で行われた。

## I. 結納授受のあいさつ

1. 仲人が新婦の家に結納を持参した時、座敷で、その家の主人（新婦の父親）に向かって、どのようなあいさつをしますか。

○コンニチワ。キョーワ オメデトー ゴザイマス。ホンジツワ  
オヒガラモ ヨロシユー ゴザイマスノデ ワタクシガ タイヤ  
クオ オーセツカリマシテ モツテ アガリマシタ。イクヒサシク  
ゴジュノー クダサイマスヨーニ ヨロシユー オネガイ  
イタシマス。今日は。今日はおめでとうございます。本日はお  
日柄もよろしゅうございますので私が大役を仰せつかりまして持っ  
て上がりました。幾久しくご受納下さいますようによろしくお願  
いいたします。（中男→中男、試演）<かしこまり><上待遇>  
<稀>

話者は、「仲人さんの場合でも、女はなんにも言わへんのですわ。式場でもどっこででも、昔から女はひつついとるだけで。」と言って、自分が実際にあいさつした訳ではないと断わった上で、豊富な仲人経験の上に立ち、「男の人ならこう言う」という想定のもとに、上記の回答を試演して下さった。

仲人夫婦は、当日の朝、新郎方へ結納の品々を受取りに行った後、新婦方に赴くが、新婦宅での玄関のあいさつは一切なされない。床の間を背にして座った後に、はじめてあいさつが行われる。それが、上記の回答の冒頭の「コンニチワ。」に表れている。

続いて「本日はお日柄もよく……」「幾久しく御受納下さいますように…」などという、結納持参時の形通りのことばが現れているが、これらは決まり文句として、現在にまで受け継がれている。

2. その家の主人（新婦の父親）は、仲人に応えて、どのようなあいさつをしますか。

○オーセノ トーリ ホンジツ メデタク ユイノーオ オウケス  
ル ハコビト ナリマシタ。ダンダント オセワニ ナリマシテ  
マコトニ アリガトー ゴザイマス。アツク オレーオ モー  
シアゲマス。ゴリッパナ オシナ ツツシンデ イクヒサシク  
ジュノー ツカマツリマス。仰せの通り本日でたく結納をお  
受けする運びとなりました。いろいろとお世話になりました誠に  
ありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。ご立派なお品  
を讀んで幾久しく受納仕ります。（中男→中男、試演）<かしこ

まり><上待遇><稲>

「ダウンド」は色々との意味であるが、このことばは日常聞かれることは稀である。また、冒頭の「オーセノトーリ」、末尾の「ツカマツリマス」も同様に、日常耳にすることはない。改まった場面という意識のもとにこれらのことばが出現したのであろう。

このあいさつの後、その家の主人である新婦の父親は、「モー アイサツワ ソノグライニ シテ。ドーソ ドーソ ハヨ クズシテ クダサイ。」と言って、仲人にくつろぎを勧めることになる。お互いに慣れない、膺の凝るあいさつを無事終えた安堵感がこのことばから感じ取れるのである。

3. そのときの新婦のあいさつがあれば記してください。

話者の結婚当時（昭和15年頃）は、結納の授受に新婦は同席しなかったそうだ。お稽古ごとに行っている間に結納の授受が終わってしまったといったケースもあったらしく、仲人と親との間だけでこの儀式はすまされていたらしい。時に同席することがあったとしても、新婦が公式に何かをしゃべるなどということは、まったくありえないとのことであった。

II. 嫁をもらう家の人へのお祝いのあいさつ

1. 嫁をもらうことが決まった家の人に道で出会って、近所の人たちはどのようなお祝いのあいさつをしますか。

○マー キマッタッタラシーデン ナー。オメデトー ゴダイマスー。  
ドッカラ キテデン ノン。（○○カラ モライマン ネン。）  
マー ヨロシー ナー。チカイ トコデ ヨロシー ナー。ソラ  
モー アッコノ コーヤッタラ エー ワー。チョード ヨカッ  
タ ナー。モー ホントニ エー ゴエンヤ ナー。まあ、  
決まられたらしいですね。おめでとうございます。どこからいらっ  
しゃるの。（○○からもらいますのよ。）まあよろしいね。近い  
ところでよろしいね。それはもうあそこの子だったらいいわ。ちょ  
うどよかったね。もう本当に良いご縁ですね。（老女→中女、試  
演）<普通><中待遇><盛>

正式のあいさつは、結婚式の日に近い大安吉日にお祝いを持参した時に行われるが、道で会った場合などには、上記のような気軽なあいさつが行われる。「ドッカラ キテデン ノン。」という花嫁の出身地を尋

ねる問いかけは、ぜひ出身地を知りたいという差し迫ったものではなく、おおむね話の継ぎ穂として行われる。したがって、たとえば「神戸の方から」などというような大ざっぱな答えであっても、それ以上詳しく尋ねることはなく、「マー ヨロシー ナー。」とつないでいく。時に細かく詮索することが行われたとしても、それは祝いのための褒めことばを捜す方便としてなされるとのことである。

2. 嫁をもらう家の人は、そのあいさつに答えて、どのようなあいさつをしますか。

○ヘー モー キマリマシタンヤ ワ。マー ヨー アンナ トコ  
カラ ヨー キテクレテヤ オモイマッケド マー ウチエ キ  
タロ ユーテヤハカイニ ケッコーナ コトヤ オモテ モライ  
マンネヤ ガイナ。 はい、もう決まったんですよ。まああんな  
くいい>所からよく来て下さると思いますけれど、まあうちに来  
てやろうと言われるので結構なことだと思っておりますよ。

(中女→老女、試演) <中待遇> <盛>

「まあ普通は謙遜してなー。」という話者の言葉通り、「アンナ ト  
コカラ ヨー キテクレテヤ オモイマッケド」に嫁をもらう家の人の  
謙遜が表されている。「キテクレテヤ」は「来て下さる」の意であり、  
「ウチエ キタロー」は、「うちのようなところへ」の意である。この  
場合、当地は地理的には比較的恵まれているので、多くは昔ながらの家  
柄なり、経済状況における謙遜と受け取れる。

### Ⅲ. 嫁に出すことが決まった家の人へのお祝いのあいさつ

1. 嫁に出すことの決まった家の人に、近所の人たちはどのようなあいさつをしますか。

○ヤー ナンニモ シラナカッタケドー アンタ トコ エー ト  
コエ イッテネヤ ソーダン ナー。(ヘー ○○ニ モロテ  
モライマンネヤ ワ。) ヤー アノ ヒトワ ヨカッタデン ナー。  
マジメナ ヒトヤシ。ホンマニ ヨカッタ ナー。マー エー  
ゴエンヤ ナー。 あのなんにも知らなかったけど、あなたの所  
はいい所へ嫁がれるそうですね。(はい、いついつにもらって  
もらいますよ。) やあ、あの人はよかったですね。真面目な人だ  
し。本当によかったね。まあ、いいご縁ですね。(中女→中女、  
試演) <中待遇> <盛>

「あなたの娘さん」が「アンタ トコ」、「繁晴らしい男性」が「エー トコ」と表されているところに、やはり昔流の家対家の結婚形態がうかがえる。また、さかんに「エー トコ」「エー ゴエン」が強調されているが、これらも通常は、昔ながらの家柄なり、経済状況に対する評価であろう。ただ、この回答の場合には「アノ ヒト」と具体的に指摘し、「マジメナ ヒト」と褒めている。相手の男性を知っている場合にのみ、このようなあいさつも可能なのではあるが、相手を個人として褒めるこのような言い方が、今後は増えて行くものと考えられる。

2. 嫁に出す家の人は、そのあいさつに答えて、どのようなあいさつをしますか。

○エー ゴエンガ アッテ モロテ モライマスネヤ ワー。 マー ウチラ モーテ モラウヨーナ トコヤ ナインデッケド マー  
○○サンガ ナカエ タッテ ハナシ シテ クレテデシタン  
デ マー エー ゴエンヤ オモテ モロテ モライマス ンデス  
ワ。 いいご縁があってもらってもらいますのよ。まあ我が家がもらっていただくような所ではないのですが、まあ○○さんが中に立って話をして下さいだったので、まあ良いご縁だと思ってもらっていただくのですよ。(中女→中女、試演) <中待遇><盛>

日本人にとって、結婚は縁談(縁のもの)であるという考えを如実に示したあいさつ表現である。また、「ウチラ モーテ モラウヨーナ トコヤ ナインデッケド」は、当然謙遜の表現であるが、ここにも家意識がはっきりと感じられる。さらに、「モーテモラウ」という表現に、結婚が男女対等の関係の上に結ばれるものではなく、いまだに男性優位の考え方の上に成り立っていることを表している。このように、上記のあいさつ表現には、日本人の結婚に対する考え方の一典型が如実に表されていて、非常に興味深いものがある。

#### IV. 結婚式当日のあいさつ

結婚式当日、結婚式に出席した人たちは(親戚以外)、どのようなあいさつをしますか。

この質問に対しては、話者は答えようがないと言われる。なぜなら、当時(戦前を指す)、結婚式に列席するのは、主に親戚の、それも血の濃い者に限られたため、親戚以外の列席者は皆無であったという。親戚以外の、たとえば新郎の父親の友人などを呼ぶとすれば、それは結婚式

の翌日、あるいは翌々日に再び祝宴を開き、その席に「なじみ客」として呼ぶのである。したがって、以下の回答は、昔流の結婚式における親戚の人からのあいさつ、及び親戚の人に対するあいさつということになる。

1. 新郎の父親にどのようなあいさつをしますか。

○キョーワ オメデトー ゴダイマス。オコトバニ アマエテ キョーワ レッセキ サシテ イタダキマス。今日はおめでとうございます。お言葉に甘えて今日は列席させていただきます。(中男→中男、試演) <古><かしこまり><上待遇><稀>

これはかなり改まった言い方である。新郎の父と心安い間柄であれば、

○オメデトー ゴザイマス。ヨカッタ ノー。ンナ マー コッチデ マタシテ モラウ ワ。おめでとうございます。よかったね。じゃあまあこちらで待たせてもらうよ。(中男→中男、試演) <古><くだけ><中待遇><稀>

となる。いずれにしても、結婚式に呼ばれる以上、それ以前に祝いを持参して正式のお祝いを述べているので、当日は改めて堅苦しいあいさつを長々とすることはないということである。また、昔は夜、新郎宅で結婚式が行われたので、早めに新郎宅に赴いた客がこのようにあいさつをして、控え室へ行ったということである。

1-2. 父親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

○ホンジツワ ゴムリオ モーシテ ゴクローハンデ ゴダイマス。マー カタイ アイサツワ コノグライニ シテ。シンタクノ オッサンモ キテ クレトツテヤサカイ ウラノ ザシキヘ トー ットクレ。サー ドード ドード。本日はご無理を申してご苦勞様でございます。まあ固いあいさつはこの位にして。新宅のおじさんも来て下さっているから裏の座敷へ通って下さい。さあどうぞどうぞ。(中男→中男、試演) <古><くだけ><中待遇><稀>

相手の固いあいさつを受けて型通りのあいさつをした後は、親しい者同士ということで、くだけたあいさつになる。「シンタク」は、分家のこと、本家は「ホンヤ」と呼ばれている。「ドード」はもちろん「どうぞ」で、当該地域では老人から子供にいたるまで、ザ行とダ行の混同が比較的良好に見られる。

2. 新婦の父親にどのようなあいさつをしますか。

○ホンジツワ オメデト ゴザイマス。ゴショータイ ウケマシ  
タノデ キョーフ オシュートイリニ イカシテ モライマスノ  
デ ヨロコンデ アガリマシタ。本日はおめでとうございます。  
 ご招待を受けましたので、今日はお翳入りに行かせてもらいます  
 ので、喜んで上がりました。(中男→中男、試演) <古><かしこ  
 まり><上待遇><稀>

「翳入り」とは、新婦の父、及び親戚の者が、結婚式に出席するため、  
 当日、新郎宅に行くことで、親戚の者は、五人とか七人とか、人数を奇  
 数に揃えるのが常であった。この「翳入り」のために新婦宅に赴いた時  
 に、親戚の者が新婦の父親にするあいさつが、上記のものである。

2-2. 父親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

○ナンヤカヤト イソガシー ヒトニ ムリナ コト ユータ ス  
ンマヘン。ナンド ユータラ イツモ オセワニ ナリマツケ  
ンド ヨロシュー オネガイシマス。何や彼やと忙しい人に無  
 理なことを言ってすみません。何かと言えお世話になりますが、  
 よろしく願います。(中男→中男、試演) <古><かしこま  
 り><中待遇><稀>

ここでも日ごろ親しい付き合いをしている同士なので、長々としたあ  
 いさつは省かれ、ごく簡単なあいさつになっている。このあと「下ド、  
下ド。」ということで奥に招じられることになる。

V. 結婚式後、姑が新婦を連れて近所の家へあいさつに回る時、姑はどのよ  
 うなあいさつをしますか。

1. 結婚式後、姑が新婦を連れて、近所の家にあいさつをして回る時、姑  
 はどのようなあいさつをしますか。

○コノ タビワ イロイロト アリガト ゴザイマシタ。コレガ  
ヨメデ ゴザイマス。( <嫁が> フツツカナ モンデスケド  
ドド ヨロシュー オネガイシマス。) ヨロシ タノンマツ  
セ。この度は色々ありがとうございました。( <嫁が> 不束な  
 者ですがどうぞよろしく願います。) よろしく願いま  
 しますよ。(中女→中女、試演) <古><中待遇><稀>

配り物に「ジュウカケ」(袱紗)をかけて、一軒一軒配りながらあい  
 さつをしたという。嫁のあいさつまでは格式ばったものであるが、その  
 後の「ヨロシー タノンマツ セ。」は完全な土地ことばであり、くだ

けた表現の中に、以後の親密な付き合いを求める気持ちが込められている。

2. そのあいさつに応じて、近所の人はどうのようなあいさつをしますか。

○カワイラシー オヨメサンデン ナー。マー コッチコソ、ドーゾ ヨロシユー オネガイシマス。ウチモ ワカイ モンガ コナイシテ オリマスンデ ナカヨー シタッテ クンナハレ ヨ。

可愛らしいお嫁さんですね。まあこちらこそよろしく願います。我が家も若い者がこのようにいますので仲良くしてやって下さいよ。(中女→中女、試演) <古><中待遇><稀>

配り物の礼を言った後、「ジュウ カケ」を返しながらのあいさつである。土地ことばと、初対面の相手を意識した改まったことばとが入り混じった表現になっている。最後の、「ナカ ヨー シタッテ クンナハレ ヨ」という土地ことばに、前問の「ヨロシ タノン マツ セ。」同様、以後の親密な付き合いを求める気持ちが強く感じられる。

#### VI. 嫁を迎えた家の人へのお祝いのあいさつ

1. 10日ほど前に、長男(29歳)に嫁をもらった60歳台の父親へ、結婚式に招かれた50歳台の女性が、昼下がりの路上で、どのようなお祝いのあいさつをしますか。

○コナイダワ、ドーモ アリガトー ゴザイマシタ。マー エーケッコシキデシタ ナー。カワイラシー ハナヨメサント ハナムコサンデ、マー ホンマニ モー トクシン シマシタ ワー。ドナイデス。キゲンヨー ションナハル カイナー。( <相手が>イマ リョコー シトリマス。) イヤー ヨカッタ ナー、ホンマニ。ソー ソコエ イトッテデン ノン。アア ワカイ ヒトタチヤッタラ、グアイ クラシテデス。ワ。オトーサンモ ヨカッタデン ナー。この間はどうもありがとうございました。まあいい結婚式でしたね。可愛らしい花嫁さんと花婿さんで本当に満足しましたよ。どうです。機嫌よくしていらっしゃいますか。 <今旅行しています。> いやよかったね、本当に。そう、そこに行っていていらっしゃるんですか。あの若い人達だったらうまく暮らされるでしょう。お父さんもよかったですね。(中女→中男、試演) <新><中待遇><盛>

結婚式に出席させてもらったお礼を言った後、その感想を述べたり、



その後の様子を尋ねたりしながら、上手に新郎新婦を褒め、最後は、父親に対する思いやりで終わっている。実に巧みなあいさつと言えるだろう。試演でありながら、このようにあいさつを巧みに構成出来るのも、この話者が常にこのようなあいさつが交わされる世界に身を置き、優れた経験を積み重ねているためと考えられる。

2. 父親は、それに応じて、どのようなあいさつをしますか。

○アー オーキニ。コナイダワ スマン コッテシタ。マー キゲン  
ンヨー シトリマス。イマ 〇〇エ リョコー シトリマン ネ  
ン。マー カイラシー コト ユーテ デテ イキマシタ ガイ  
ナー。エー ケッコンシキ シテモーテ ヨカッタ オモイマン  
ネヤ。ああ ありがとう。この間はすみませんでした。まあ機嫌よくしております。今〇〇へ旅行しておりますよ。可愛らしいことを言って出て行きましたよ。よい結婚式をしてもらってよかったと思っておりますよ。(中男→中女、試演) <新><中待遇>  
<盛>

「コナイダ」は「この間」、「カイラシー」は「可愛らしい」のそれぞれ母音が脱落したもの。当地には、このような音の脱落がしばしば見られる。また、「コッテシタ」は「ことでした」の促音便化したもの、「シトリマン ネン」は「しておりますねん」の撥音便化したもの。当地では、このような音便化現象もよく見られる。それぞれ当地方言の一特徴と言うことが出来よう。

「アー オーキニ。」で始まり、上記の音の脱落現象、音便化を数多く含むこのあいさつ表現は、かなりくだけたものであるが、「です」「ます」という丁寧体を常に使うなど、結婚式に列席してくれた相手に対する心配りも決して忘れられてはいない。「親しきなかにも礼儀あり」の配慮が行き届いたあいさつと言えるであろう。

Ⅶ. 結婚式後の仲人へのあいさつ

1. 結婚式後、仲人の所へ新郎新婦(あるいは両親)がお礼に行った時、どのようなあいさつをしますか。

○アツイ オセワニ ナリマシテ。ゴカニチガエリモ スミマシテ  
キゲンヨー シトリマスノデ。イロイロ アリガトー ゴザイ  
マシタ。たいへんお世話になりました。五か日帰りも済みまして、機嫌よくしておりますので。色々ありがとうございました。

(青男→中男、試演) <古><かしこまり><上待遇><稀>

「五か日帰りと」とは、「婿入り」とも呼ばれ、結婚式後五日目に新郎新婦と仲人とが、新婦の実家を訪問して接待を受けることで、結婚式の御馳走に負けず劣らずの料理が準備される。現在では、新婚旅行が間に挟まるために五日目にこだわることはないが、結婚式に次ぐ大切な儀式として尊重されている。さらに古くは、「三が日帰り」(さんがにちがえり)と呼ばれて、式後三日目に招待されていた。

「ナリマシテ。」「キゲンヨーニ シトリマスノデ。」は、その後のことばが省略されたもので、このように言いさすことによって感謝の気持ちが十分に表されている。あいさつ表現には、このような言いさしの表現がよく用いられ、その表現効果を高めることが多い。また、冒頭の「アツイ オセワニ」のアツイは、この意味で日常的に使われることはなく、定型化したあいさつ表現にのみ用いられるものである。新郎としての改まり意識が、このような定型化した表現を選ばせたものと考えられる。

2. 仲人は、それに応じて、どのようなあいさつをしますか。

○ヨカッタ ネー。イツマデモ ナカヨー シナハレ ヨ。イツデモ コッチ キタツタラ ヨツテ クダサイ ヨ。よかったね。いつまでも仲良くして下さいよ。いつでもこちらへ来られたら寄って下さいよ。(中男→青男・青年女、試演) <新><中待遇><稀>

このあいさつ表現には、共通語を意識した「クダサイ」や文末詞の「ネー」、土地ことばの「シナハレ」や「キタツタラ」が入り交じっている。若い二人を前にして、改まり意識とざっくばらんさが程よく調和した表現と言えよう。

## Ⅷ. 嫁のはじめての里帰りのあいさつ

1. 嫁がはじめて里帰りする時、嫁ぎ先の親に、どのようなあいさつをしますか。

○オトーサン オカーサン ソレデワ イマカラ サトガエリ シテ モライマス。タクサン オミヤゲ イタダキマシテ。コレオ モツテ アガリマス。ドーモ アリガトー ゴザイマス。ホナ イツテ マイリマス。お父さんお母さん、それでは今から里帰りをさせてもらいます。たくさんお土産を頂きまして。これ

を持って上がります。どうもありがとうございます。それでは行って参ります。(齊女→中女、試演) <古><かしこまり><上待遇><稀>

嫁のはじめての里帰りは、前出の「五か日帰れ」のことであるが、そんなにいんぎんなあいさつはなされなかったという。婚家から実家へのお土産を携えての里帰りということで、その礼が主なものであった。

2. 両親は、それに応えて、どのようなあいさつをしますか。

○ムコーノ オトーサン オカースンニ ヨロシー ユートクンナ  
ハレ ヨ。ユックリ ヤスマシテ モーテ ハヨ カエンナハレ。

向こうのお父さんとお母さんによろしく言って下さいよ。ゆっくり休ませてもらって早く帰ってきなさいよ。(中女→齊女、試演) <古><中待遇><稀>

「ゆっくり休ませてもらって早く帰ってきなさいよ。」は、矛盾したことばだと思われるが、実際にこう言われていたそうである。嫁に対する心遣いと、嫁の実家に対する遠慮が同時に込められた表現と言えるだろう。

(兵庫県立社高等学校 教諭)